

SNS時代の情報モラル教育に関する考察

—中学校における情報モラル教育の授業実践に向けて—

時津 啓

＜日本語要旨＞

本稿の目的は、SNSにおけるコミュニケーションの特性を明らかにし、中学校における情報モラル教育の実践のあり方を検討することにある。

SNSにおけるコミュニケーションを分析することで明らかなことは、SNSが「過剰なコミュニケーション」を強制していることであった。生徒らはいつでもどこでもコミュニケーションを取ることができ、自らのメッセージを読んでいるか否かも認識することができる。彼らはこのメディア環境で友人や親との関係を構築している。

本稿は、生徒らはSNSにおけるコミュニケーションをコントロールすべきことを結論として主張した。そうすることで、時と場所に応じてコミュニケーションすることができる。彼らは、SNS時代の中で、情報モラルを再構成する可能性を有することを示した。

キーワード (Key-Words) : 情報モラル教育 (the moral education of information and media ethics)、SNS(Social Network Service)、中学校における道徳教育 (Moral Education in Junior High School)

はじめに

本稿の目的は、現代を代表する SNS (Social Network Service) 上のコミュニケーションの特徴を明示し、SNS 時代の情報モラル教育、とりわけ中学校における道徳の授業実践のあり方を検討することにある。

SNS とは、ネット上の交流を通じて、社会的なネットワークを構築するサービスのことである。それは、会員登録を行った利用者同士がつながる、あるいは人と人とのつながりを促進するサポートを行う。たとえば、Facebook や Twitter、近年では LINE などがその代表的な存在と言えよう。

SNS が登場する以前、ネット上のコミュニ

ケーションの中心はメールであり、ホームページであった。ここで、生徒らはマスメディア時代のように、情報受信者としての能力—マスメディアからの情報を批判的に解読することなど—だけを求められているわけではない。むしろ、情報発信者としてのマナーやルール、見えない相手とのコミュニケーションへの配慮などを求められている [赤堀 2010/ 田中 2009]。

道徳教育の先行研究に限定すれば、2010 年に『道徳と特別活動』が情報モラルの特集を組んでいる。ここでは 2009 年文部科学省が実施した『子どもの携帯電話等の利用に関する調査結果について』[文部科学省 2010]を紹介、分析している。そして、主に携帯電話を通してなされるメールの送受信やプロフ（プロフィール



サイト）と呼ばれる自己紹介ページをめぐるコミュニケーションを議論の俎上にのせ、新たなメディアに対する道德教育の対応を模索している〔梶本 2010/ 溝口 2010/ 永野 2010〕。もちろんこれらの議論の根底には、2008年に改訂された学習指導要領が情報モラル教育の内容やあり方を指示したことがあるだろう⁽¹⁾。裏を返せば、2008年改訂の学習指導要領もまた、メールやブログなどのメディアを想定した情報モラル教育を提唱している。詳細は後述するが、その内容として個人情報の保護、人権侵害、著作権などの法令への対応、ネットワーク上のルール、マナーをあげている〔文部科学省 2008:102〕。一言で言えば、情報発信者としての情報モラルである。

しかしながら、このような先行研究の認識は不十分に思えてならない。たとえば、現在高校生や大学生はパソコンのメールはもちろん、ケータイのメールですらほとんど利用せず、それらへメッセージを送っても無駄なケースも多い。見ていないのである。その代わりに彼らはSNSを利用する。ここでは会話形式でコミュニケーションが展開されることが多く、生徒らは対面して言葉をやり取りするように、文字、写真、イラストなどを組み合わせてコミュニケーションを行っている。このような現状を考えるならば、彼らは「情報受信者から情報発信者へ」と変化しただけではない。むしろ、マスメディア時代やメール時代とは比べものにならないほどの情報を受信し、処理している。いわば、これまで以上に情報受信者でもある。

このように問題は、SNSの登場に伴って変化したコミュニケーションにある。本稿は現代社会学や情報社会論の知見にしたがい、ネット、とりわけSNSにおけるコミュニケーションの特徴を明示する。そして、この特徴と中学校における情報モラル教育の授業実践との乖離

を明らかにする。本稿が中学校の授業実践に注目するのは、次のように考えるからである。多くのユーザーは、スマートフォンを介してSNSを利用する。高校生になると、およそ半数の生徒がスマートフォンを所持する〔総務省 2013:5〕。そのため、中学校における情報モラル教育の実践は、多くの生徒がSNSを利用するための準備と捉えることができる。それは、SNSにおける振舞いや態度を決定づけるのではないかと考えるからである。

本稿は、SNSのコミュニケーションの特徴を踏まえた授業実践のあり方を具体的に示す。確かに現代は、メール時代を経てSNS時代へ入りつつある。本稿の試みも新たなメディアへ対応する試みの一つにすぎない。しかしながら、SNSにおけるコミュニケーションへの問いは、SNS時代を生きる生徒らのコミュニケーションや人間関係といった道德教育の核心への問いでもある。この点に、生徒のメディア利用の実態に即した授業実践を模索する意義はある。

結論を先取りすれば、本稿はこれまでの道德教育の中で消極的に捉えられてきた「すれちがう」「おりる」行為を積極的な作法として評価し直すことになるだろう。そして、これらの作法が今後の情報モラル教育を方向付ける可能性を解明する。

1. 情報モラル教育の必要性和学校教育における情報モラル教育の位置づけ

総務省が2013年2月に実施した『青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査』によれば、中学生の88.2%が家にパソコンを所持し、自分でも利用していると答えている。さらにスマートフォンの場合、中学生の21.3%、ゲーム機（多くの場合、ネット接続が可能）に関しては中学生の83.3%が所持し利



用している[総務省 2013:2-21]。中学生の日常生活にはネットに接続可能な情報端末が浸透している。

こうした浸透は、情報の収集や表現、発信などを容易にする一方で、「影の部分」を作り出しており、それが深刻な社会問題を引き起こしている[文部科学省 2008:102]。この点に、情報モラル教育の必要性を見出すことができる[加納 2005:13]。ここで求められるのは、単に「影の部分」を理解するだけではなく、その上でよりよいコミュニケーションや人間関係作りのための判断力や心構えを育成することである[文部科学省 2011:117-118]。中学校の学習指導要領においては、次のように述べられている[文部科学省 2008:102-103]。「第3章 道徳」「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の3に「生徒の発達の段階や特性などを考慮し、第2に示す道徳の内容との関連を踏まえて、情報モラルに関する指導に留意すること」、と。具体的には、ネット上の書き込みのすれ違いなど他者への思いやりや礼儀の問題及び友人関係の問題、情報を生かすときの法や決まりの遵守に伴う問題を取り上げるべきとされている。

さらに言えば、道徳の時間における情報モラル教育は、情報機器の使い方やインターネットの操作、危険回避の具体的な練習に主眼を置くのではないとされる⁽²⁾。道徳の時間におけるそれは、問題の根底にある他者への共感や思いやり、法や決まりのもつ意味について考えを深めると言うのである[文部科学省 2008:103]。見通しを述べれば、本稿は、このような理解がSNSのコミュニケーションにおいて、困難を抱えてしまうことを論証していくことになるだろう。

2. ネットとSNS上のコミュニケーションの特徴

2. -1 ネット上のコミュニケーションの特徴

我が国においてインターネットが普及し始めたのは1990年代である。当初、このメディアは「匿名性」のメディアと言われた。ネット上では男性であっても女性になりきることができる。あるいは麻薬などの売買がネット上でなされたことがその根拠だろう。しかしながら、私たちはサイトを一つ見るごとに、自分の使用機種やブラウザの種類、そのサイトに入る直前に見ていたページのアドレスなどの情報を相手のサーバーに無防備に晒している。そもそもネットは、ラジオやテレビと本質的に異なり、ユーザーのコンピュータがサーバーに要求を出し、それに応えて送られてきた情報を再構成することで成立する双方向型のメディアである[東 2007:17]。テレビを観ること、新聞を読むこと、手帳に日記を綴ることは、匿名的な行為である。それに対して、哲学者東浩紀の言うように、ネット上の「匿名性」は、表面的で疑似的であり、匿名掲示板や出会い系サイト利用者は、本人たちこそ匿名だと信じているが、多くの場合はさまざまな方法で特定可能である[東 2007:119]。

このような「非匿名性」を有するネットは、何をもたらしているのだろうか。二人の社会学者バウマン(Zygmunt Bauman)とライアン(David Lyon)は、電話処理のソフトウェアに注目している。このソフトは、電話をかけてくる相手が企業に利益を高めてくれる人物かそれともそうではないかを判別する(会員番号やお客様番号、あるいは電話番号での識別も可能だろう)。高めてくれそうな人物は即座に決定を下すことのできる上級オペレーターへ接続される。それに対して、見込みなしと判断された人物は最初にオペレーターにつながるまで



退屈なメッセージを聞かされて延々と待たされる。そうした扱いを我慢して電話を切らずにしていると、問題を解決する権限のないオペレーターにつながれるという具合である [バウマン+ライアン 2013:100]。

その他にもグーグルは、各ユーザーのそれまでの検索履歴をもとにして、検索結果を洗練させる。その結果、ユーザーが違えば、グーグルで同じ言葉を検索しても異なる結果にたどりつくこともある [バウマン+ライアン 2013:158]。ここでバウマンらが指摘するのは、メディアが人間を選別している事態である。メディアは、「膨大な個人情報の蓄積を元手に、私たちが自分で何かを判断する前に、すべきことの指針を提示してくれる」 [鈴木 2007:222] のである。この事態は、特有の企業が行っている特別なことではない。たとえばメールのユーザーは、着信したメールにどの程度の時間をかけて返事をするかによって、自分の気持ちを相手に知らせてしまう [土井 2008:152]。ユーザーの意思は、返信するまでの時間（データ）として変換・記録され、ユーザー同士の関係へ影響を与えている。

2. -2 SNS 上のコミュニケーションの特徴

SNS は、ネットの特徴を強化していく。SNS は自らの行動を日記にしたり、コミュニケーションの履歴が残っていくシステムである。一人の人間がどこで、どのような行動をとっているのかはウェブ上に事細かく蓄積されている。これは、現実そのものをウェブに残すことを意味しない。むしろ、逆に現実がウェブの記録に依拠して構成される。ウェブ上のデータこそが現実を映す鏡となる [鈴木 2013:56]。

さらに言えば、SNS の場合、「ホームページ」という概念すら希薄である。SNS へ最初にア

クセスすると、目に飛び込んでくるのは他人の投稿である。多くは、時間ごとに、他人の行動が記載されている。友人が海外旅行に出かけたこと、ランチで食べたもの、自分の知らない人を「友達」として登録したことまで、直接的に「可視化」され、「カテゴリー化」の様相が見える。社会学者の鈴木謙介の言葉を借りれば、SNS の閲覧は、自分以外の人が自分とは無関係に盛り上がっている様子を目にする時間であり、SNS は孤立感を強く煽る設計になっている [鈴木 2013:76]。SNS 時代の人々が最も恐れるのは、自分が「見られていないこと」なのかもしれない [北田 2011:134]。

日常的なコミュニケーションを見れば、私たちが SNS 時代といかに向き合っているのかがわかる。たとえば、次のような具合である。Twitter でフォローしている新聞社の最新のニュースをチェックし必要があれば「お気に入り」に登録する。それとともに誰かが「もう夜明けだから寝なくちゃ」とつぶやく。通勤中の電車の中で見た面白い人、暑いとか寒いとか天気の話、「寝坊したから朝ごはんは食パン一枚だけ」「今日はこれから映画ういる」などと続く。その合間にも誰かが参加した飲み会の写真がアップされ、「いいね！」ボタンを押したり、リツイートする。このような合間に LINE でグループチャットに参加し、ソーシャルゲームと呼ばれるミニゲームを行う [鈴木 2013:65]。SNS は、ネットの「非匿名性」という特性を活かし、「可視化」「カテゴリー化」を実現した。その結果、ユーザーは「過剰なコミュニケーション」を誘発されているのである。

このように SNS 時代は、人間関係や現実構成、そして社会認識に至るまでウェブ上で「可視化」され、その機能の中で「カテゴリー化」されている。学習指導要領が道徳の時間における情報モラル教育の主眼とする他者への共感や



思いやりもまた、SNSの機能や枠組みと無関係ではない。SNS上で友人は「可視化」され、コミュニケーションが多い人／少ない人として「カテゴリー化」されている。その結果、親しい人同士が「過剰なコミュニケーション」を誘発されている。ここで言う「過剰なコミュニケーション」とは、必要な要件を知らせるために、連絡を取り合うと言うよりも、「つながっている」実感を求めて行われるコミュニケーションである。誤解を恐れず単純化すれば、要件を伝えることを目的としたコミュニケーションが「インストルメンタル（道具的）なコミュニケーション」であるとすれば、ここで描かれる「過剰なコミュニケーション」とは、「コンサマトリー（即時充足的）なコミュニケーション」と言えよう。いわば、SNS時代の情報モラル教育は、この「過剰なコミュニケーション」へ対応しなくてはならないのである。

3. 授業実践の分析

本節では電子メールのコミュニケーションを扱った授業実践を取り上げる⁽³⁾。もちろん、本稿がこの授業を取り上げるのは、SNSを取り扱った情報モラル教育が少ないからである⁽⁴⁾。しかしながら、別の意図もある。第一に、既存の情報モラル教育の延長上にSNS時代の情報モラル教育を位置づけるためである。第二に、SNSと電子メールの差異がいかに授業実践の差異へと結びつくのかを明示するためである。

この授業は、現在学校教育において展開されている典型的な情報モラル教育とは異なる。ここでいう典型的な情報モラル教育とは、「相手の気持ち」を推量することを重視し、「思いやり」を強調する授業である⁽⁵⁾。たとえば、メールは相手の顔が見えないので、伝える際にも相手がどのように受け止めるかを考え、「相手への思

いやり」の重要性を説く授業である⁽⁶⁾。つまり、ここで言う「思いやり」とは「相手への心配り」や「相手の気持ちを推量すること」と定義づけることができる。

それに対して本節で取り上げる授業は、情報発信者の立場だけではなく、情報発信者／情報受信者の双方の立場からメールのやり取りを考えている。そして、「思いやり」、すなわち「相手への心配り」や「相手の気持ちを推量すること」だけではなく、ネット上のトラブル回避をその内容としている。第1節で述べたことと照らし合わせると分かるように、この授業は、学習指導要領で副次的な内容にフォーカスしている。

以上を踏まえて、本節では前節で明示した「過剰なコミュニケーション」という点に注目して、この授業を分析する。

3. - 1 電子メールを使うときのマナー（中1、37名）一部表記を変更

（1）単元 メールだから何でも書ける？

（2）授業のねらいと概要

どの学級でもアンケートをとると、「携帯電話やコンピュータでメールを送受信したことがある者」、「そのメールのやりとりでいやな思いをしたことのある者」が少なからず存在するはずである。中には、学級内で携帯メールから人間関係が壊れるトラブルが発生している場合もある。

そこで、メールは便利である反面、相手が見えないので配慮すべき点も多いことを認識させる。そのために、悪口メールの事例をもとに、もらった相手の気持ちや、送るときや読むときの注意すべき点を考えさせる。また、自分にそのようなメールが来たらどのように対処すべきかを考えさせる。



(3) 情報モラルの学習目標・学習活動

○情報社会における自分の責任や義務について考え、行動する。

・メールは便利である反面、相手が見えない分、配慮すべき点も多いことを知る。

・何気ないメールのやり取りからトラブルが生じている事例を知る。

・メールの送受信、双方の立場で考え、注意して行動できるようになる。

○違法な行為とは何かを知り、違法だとわかった行動は絶対に行わない。

・何気ない誹謗・中傷が事件にまで発展する危険性を知り、決して行わない。

(4) 授業の流れ

【導入】

事前アンケートの結果(携帯電話・コンピュータで電子メールを使ったことがある者、メールのやりとりでいやな思いをしたことのある者の統計とその内容)を提示し、普段の生活における何気ないメールのやりとりでもトラブルが生じている実態に気づかせ、学習課題をつかませる。

【展開】

ピクチャーカードなどを使って、メールをめぐるトラブルの事例を提示し、当事者の行動について賛成・反対の立場をはっきりさせて考えさせる。その後、「実際にこんなメールが来たら」という仮想悪口メールを2パターン程度用意し、自分の対処のしかたを考えさせる。事例について考えたことをもとに、メールを使うときに配慮すべき事項を「書く側」「読む側」それぞれの立場で考えさせる。

【まとめ】

メールは非常に便利であることを認めた上で、文字だけのコミュニケーションであるので、扱いには最大限の注意が必要であることを認識させる。軽はずみな気持ちが陰惨な事件を起こす可能性のあることや、迷惑メールやワンクリック詐欺などの犯罪に巻き込まれる危険性もあることを指摘してまとめる。

(5) 授業での指導のポイント・留意点

・マナーを守って電子メールを使おうとする気持ちを高める。

(6) 参考資料

堀江龍也(2006)『事例で学ぶ Net モラル』三省堂。

(7) 子どもたちの反応

身近な事例を題材にしたこともあり、多くの生徒が対処のしかたを真剣に考えていた。1学期にトラブルを起こした生徒以外にも、実際に似たような体験をしたことのある者がおり、改めてメールを使うことの「影の部分」に気づいた様子であった。授業後の生徒の感想からもその様子がうかがえた。また、「読む側」にも配慮が必要だということに初めて気づいたと書いた生徒もおり、新たな気づきを生むことができた。

(8) 今後の展開や課題

生徒のアンケートから「チェーンメール」や「迷惑メール」ということばが出てきていた。これをもとに、架空請求やフィッシングなどのネットをめぐるその他のトラブルの回避・対処のしかたや個人情報を守ることの必要性など生徒の実生活に合わせたネットモラルの授業につなげていきたい。



3. -2 授業実践の可能性と限界

この授業は、電子メールを送受信するケースから情報モラルを修得させようとする。情報発信者／情報受信者のそれぞれの立場からメールを使用する際の配慮事項を考えさせ、迷惑メールやワンクリック詐欺などの危険性についても認識させている。

この授業実践によって、生徒らは情報化の便利さのみならず、情報社会を生きる上での注意点や「落とし穴」を認識する。本節の冒頭で述べた、「思いやり」重視の授業実践に比べて、この授業は、身近な「悪口メール」を事例とし、情報化の「影の部分」を正確に捉えている。そして、情報化特有のトラブルからの回避を模索している。ここ数年でメディア環境は大きく変化し、「悪口メール」「迷惑メール」の当事者は、悪徳業者だけではない。むしろトラブルの多くは、身近なユーザー同士で生じている。この意味でこの授業実践は、情報社会の日常を正確に捉えた、プラグマティックな授業実践と言えよう。

ここで、SNSが「過剰なコミュニケーション」を促している点に注目しよう。ドイツの社会学者ボルツ (Norbert Bolz) が述べるように、「世界コミュニケーションが開く多様なオプションの可能性にとって、われわれの時間リソースは乏しすぎる。われわれの注意力は、誰もが誰とでもコミュニケーションできるという状態に対応できない」[ボルツ 2002:75]。

SNS時代には尚更である。生徒らは、「過剰なコミュニケーション」を誘発されている。このように考えると、「思いやり」重視の授業実践には限界があるだろう。相手への「思いやり」が強調され、ユーザー間の確実なメッセージの伝達が重視されればされるほど、逆にボルツの言うように、時間や能力をこえ、強迫的にコミュニケーションを促進し兼ねないからである。それに対して、この授業は「過剰なコミュニケー

ション」への対処としても有効である。具体的には、この授業の中で生徒らには、違法行為の認識と禁止が毅然と唱えられる。そして、「悪口メール」への対処法を自ら考え、注意して行動することを学ぶ。このシミュレーションを通して、生徒らは情報化の「影の部分」を理解し、自ら具体的な対処法を修得するだろう。

しかしながら、この授業には次のような問題もある。たとえば、そもそもメールは文字のみのコミュニケーションなのだろうか。メールにおいても、文字のみでなく、絵文字や写真などの様々なメディアが使用されている。それがSNSになれば、より多様かつ複雑となる。さらに重要なことは、この授業の前提が、メールは「相手が見えない」コミュニケーションであると捉えていることにある。SNS時代とは、ある人間がどこで何を欲し、何を行ったか、本人は覚えてなくても環境（メディア）の方が記録している時代と言えよう[東 2011:86]。

第2節で述べたような「可視化」や「カテゴリー化」とは、記録がいかに表示されているのか（「可視化」）であり、記録された情報の処理のされ方である（「カテゴリー化」）。ということは、ユーザーの発信／受信するあらゆる情報が記録され、相手の気持ちや表情が読み取れてしまう。厳密に言えば、相手の気持ちや表情が推察できるような情報が提供されるのである。たとえば、LINEにおいて送信者は自らのメッセージを受信者が読んだか否かを「既読」表示によって確認することができる。このようにSNSは、メールなどのユーザーが知らなかった情報を提供するため、ユーザーは「見ているのに返事がないのはなぜだろう」と不安を駆りたてられ、「過剰なコミュニケーション」へと誘発されてしまう。

生徒がSNSへ参加することは、このような事態を引き受けることを意味する。そのため、



私たちが対面的なコミュニケーションを出発点として、SNSを「相手の見えない」コミュニケーションと見なす限り、SNSの本質的な問題は捉えきれない。なぜなら、SNSの「過剰なコミュニケーション」は、むしろ「相手が見えすぎる」ために誘発されているからである。その意味で、本節で取り上げた授業は、SNSへの参加を準備する中学校における情報モラル教育として限界を有している。必要なことは、シミュレーションを通して、トラブルの回避を模索する方法を踏襲した上で、SNSの特徴である「可視化」「カテゴリー化」へ抗することであり、生徒が「過剰なコミュニケーション」をコントロールする力を育成することにある。

おわりに

本稿は、SNSが「過剰なコミュニケーション」を誘発しており、SNS時代の情報モラル教育には、その対処が要求されていることを明らかにした。そして、シミュレーションを通して、生徒自らがトラブル回避を模索する授業実践が有効であることを認めつつ、「相手が見えすぎる」ゆえに誘発されるSNS特有のコミュニケーションへ対処すべきことを示した。

ではどうすればよいのだろうか。具体的な方向性を示したい。現行の学習指導要領は、マスメディア時代からメール時代への移行に伴って、「情報受信者から情報発信者へ」と生徒の変化を捉えている。しかしながら、SNSにおけるコミュニケーションを手がかりにすれば、「情報受信者／情報発信者」のいずれか一方では捉えることができない「複雑性」にこそ目を向けるべきであろう。生徒は、「つながることが当然」のメディア環境の下で、メッセージを読んだか否かまで「可視化」され、人間関係はメディアによって「カテゴリー化」され、「過

剰なコミュニケーション」を誘発されている。

SNS時代の情報モラル教育に必要なことは、このサイクルを寸断することである。そのため、SNSにおけるコミュニケーションにおいては、必ずしも応答することを要求すべきではないだろう。なぜなら、「思いやり」重視の授業実践と同様に、応答責任を重視すれば、逆に時間と能力をこえたコミュニケーションを誘発するからである。むしろ逆に、「すれちがう」「おりる」行為を積極的に評価すべきだろう。これらの行為こそが、上述したSNSが作り出すサイクルを寸断するからである。それゆえ、SNS時代においてこれらの行為は積極的なマナーとなり得る。

本稿の文脈に照らし合わせて、道徳教育を捉えるならば、それは、健全な人間関係の構築へ寄与する試みのひとつと言えよう。いわば、本稿はその前提に基づく技術論の一つに過ぎないのかもしれない。事実、生徒らがSNSから「おりない」のはその後の人間関係を担保できるかどうか不安だからである。しかしながらSNS時代とは、多くの人といつでもどこでも「つながる」、そしてそれが記録される時代である。人間関係も、このウェブに記録された情報に依拠して構築されつつある。「すれちがう」「おりる」行為は、SNSの作り出す「つながり」を寸断し、記録を残さないことを意味する。SNSユーザーとして生きる生徒には、他者の「おりる」自由を担保し、他者と適切に「すれちがう」ことが必要である。そのような作法こそが一義的に説かれるべきではなかろうか。なぜなら、「過剰なコミュニケーション」を誘発するSNSが浸透する時代には、このような他者をめぐる作法なしに、健全な人間関係を構築できるはずがないからである。

SNS時代の情報モラル教育は、「悪口を言わない」発信者としてのモラル、あるいは「悪口



への対処法」だけを修得すべきではない。コミュニケーションの当事者として、言語、写真、イラストといった多様なメディアを使用して、「おりの」「すれちがう」といった他者をめぐる作法も情報モラル教育で修得すべきものにちがいない。

参考文献

赤堀侃司 (2010) 『コミュニケーション力が育つ情報モラルの授業』 ジャストシステム。
 東浩紀 (2001) 『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』 講談社。
 東浩紀 (2007) 『情報環境論集 東浩紀コレクションS』 講談社。
 東浩紀 (2011) 『一般意志 2.0—ルソー、グーグル、フロイト』 講談社。
 小川哲哉 (2012) 「現代社会と道德教育—高度情報化社会の課題」 小笠原道雄他編『道德教育の可能性—徳は教えられるのか』 福村出版、126-135 頁。
 梶本佳照 (2010) 「教育活動に情報モラルを位置付ける」『道德と特別活動』 26 (11)、10-13 頁。
 加納寛子 (2005) 「情報モラル教育」 加納寛子編著『実践情報モラル教育—ユキビタス社会へのアプローチ』 北王路書房、12-17 頁。
 北田暁大 (2011) 『広告都市東京』 筑摩書房。
 札幌市立平岡中学校 (2014) 「ネットでコミュニケーション (SNS の怖さ)」『平岡の情報モラル教育』
<http://www.hiraoka-j.sapporo-c.ed.jp/2014/info/joho/index.html> 2014 年 8 月 18 日閲覧
 鈴木謙介 (2007) 『ウェブ社会の思想—く遍在する私—をどう生きるか』 NHK 出版。
 鈴木謙介 (2013) 『ウェブ社会のゆくえ—く多

孔化—した現実のなかで』 NHK 出版。

総務省 (2013) 『青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査』。 <http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2013/internet-addiction.pdf> 2014 年 8 月 18 日閲覧
 田中博之 (2009) 『ケータイ社会と子どもの未来—ネット安全教育の理論と実践』 メディアアイランド。
 時津啓 (2014) 「中学校における道德教育の実際 2—情報モラル教育の実践とその批判的検討」 丸山恭司編『道德教育指導論』 協同出版、261-271 頁。
 土井隆義 (2008) 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』 筑摩書房。
 永野和男 (2010) 「新学習指導要領における情報モラル」『道德と特別活動』 26 (11)、6-9 頁。
 バウマン、Z. + D. ライアン (伊藤茂訳) (2013) 『私たちがすすんで監視し、監視されるこの社会について—リキッド・サーベラスをめぐる 7 章』 青土社。
 広島県教育委員会 (2011) 「豊かな心を育てる道德教育コーナー—大竹市立玖波中学校の実践 生徒の内面性に根ざした道德性の育成—情報モラルを育てる道德の時間の指導」 <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/12doutoku/12doutoku-h23sodateyou-2-kuba-top.html> 2014 年 8 月 18 日閲覧
 ボルトン、N. (村上淳一訳) (2002) 『世界コミュニケーション』 東京大学出版会。
 溝口博史 (2010) 「道德教育 道德での情報モラル指導と保護者への情報提供」『道德と特別活動』 26 (11)、22-25 頁。
 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 道德編』 日本文教出版。
 文部科学省 (2011) 『教育の情報化に関する手引き 平成 22 年 10 月』 開隆堂。



 注

(1) この点に関しては以下が詳しい [小川 2012]。

(2) 田中博之は、ケータイやネットの適切な活用法を教えることを情報モラル教育と捉え、今日ではこれをこえて、ネット社会を生き抜く危機管理能力（犯罪抑止力や自己防衛能力）が必要であるとする。そして、そのような能力を育成するために、ネット安全教育を提唱している [田中 2009:87-88]。

(3) この授業は、平成 18 年度文部科学省委託事業『情報モラル等指導サポート事業』の成果をまとめたサイトからの抜粋である。http://kayoo.org/moral-guidebook/jirei/10_3.html 2014 年 8 月 18 日閲覧

(4) SNS を取り扱った授業としては、たとえば以下を参照 [札幌市立平岡中学校 2014]。

(5) このような授業への批判的検討して以下を参照 [時津 2014]。

(6) このような授業としてたとえば以下を参照 [広島県教育委員会 2011]。

A Consideration About Education of Information and Media Ethics in the SNS Age: Toward the Educational Practice of Information and Media Ethics in Junior High School

Kei Tokitsu

The purpose of this paper is to clarify the characteristic of communication in SNS, and I consider how to practice the moral education of information and media ethics in junior high school. SNS is a service for the user to construct social network and social relationship, friendship through communication in internet. For example, it is in such as Facebook, Twitter, and LINE. In analyzing the communication of SNS, it was found that students have been forced to excessive communication in SNS. Students can communicate anytime and anywhere, and they can understand whether or not others have read their messages. Through this media environment, they construct their relationship between their friends, their parents. I concluded that the students as a user should control their communication in SNS. Depending on the time and place, students should be able to communicate with others in SNS. And, they also reconstitute information and media ethics in the SNS age.

キーワード (Key-Words) : 情報モラル教育 (the moral education of information and media ethics)、SNS(Social Network Service)、中学校における道德教育 (Moral Education in Junior High School)